

雜 錄

獨逸製鋼所組合「國際カルテル獨逸の製鋼高」(Iron & Coal Trades Rev. Dec. 13, 1935) 最近刊行された在ジュネセルドルフ獨逸製鋼所組合の1934年々報は、同年に於ける獨逸産業の躍進を報じ同時にこれは政府の採つた政策に一部歸因するものとなし其の製鋼業に及ぼせる影響も又甚大で斯業はこれが爲め著しい復活を示すに至つたと論じて居る。1934年の製鋼高は1933年の761萬1,789tから1,191萬6,426tに増加した、而もこの數字には勿論ザール工場の生産高は含まれてゐない。對外貿易に於ては、爲替の制限、關稅の障壁及輸出の割當等幾多の障害に當面せるにも拘らず獨逸の鐵鋼輸出高は著しく増加し、1934年に於ける本組合の輸出高は(薄手薄板及亜鉛鋼板を除く)1933年の93萬3,300tから143萬2,200tへ増進した。

カルテルの影響 斯の如き好轉は國際的諸カルテルの活動に負ふ所が少くない。チエコスロベキヤ、埃地利及ハンガリーの鐵鋼業と部分的協約が締結され締結され廣鋸工形シンデケート (Wide Flage Joist Syndicate) の成立を見るに至つた。又英國とは船用鋼板協定が締結された。加ふるに、1934年3月には波蘭の鐵鋼業と輸出入の割當を定むる協約が締結された。これに反し價格の回復は極めて遅々でカルテル成立前の慘落状態から蝸牛的上向の歩を辿つた。

ザール工場 1934年2月18日、ザール工場は獨逸の鐵鋼シンデケートに全部加入することゝなつた。これが爲め佛獨割當協定の廢棄を見、ザール工場から佛蘭西へ、又ロレーヌ工場から獨逸への積出は停止することゝなつた。本組合の傘下に在る個々のシンデケートの活動に就て概説すれば次の通りである。

A-プロダクトシンデケート 1934年に於ける半製品の國內取引は非常に活況を見せたが輸出貿易は左程でなかつた。半製品の對英貿易に於ては再び熾烈な競争に當面し、又半製品の上得意先である日本市場に於ては亞米利加との競争が激化するに至つた。然しそれにも拘らず輸出高は尙30%の増加を示したのであつた。半製品の販賣高は77萬7,214t(前年48萬1,059t)で内、國內取引高52萬8,169t(前年29萬7,361t)輸出高24萬9,045t(前年18萬3,698t)であつた。

鐵道材料の輸出貿易は國內取引の増進とほぼ歩調を共にし1934年に於ては販賣總高の16.5%(1933年14.86%)を占めた。注文は年間を通じて引續きあつたので壓延計畫上大いに便宜がよかつた。

1934年の販賣總高は88萬0,013t(前年70萬3,492t)内73萬4,838t(前年59萬8,960t)は國內、14萬5,175t(前年10萬4,532t)は對外取引であつた。

形鋼及ジョイスト國內需要は1934年の最初2-3ヶ月間は前年末と同様な率で増加したが春以來は注文高に殆んど變りなかつた。然し建築界活況の爲め11月及12月には例年の如き季節的の減退を見なかつた。一方輸出貿易は可なりの景況を持續し前年より殆ど2倍近くの増加を示し又輸出價格も上半期中に於て上向く所があつた。1934年の販賣總高は71萬8,828t(前年37萬466t)内、56萬2,688t(前年29萬1,232t)は國內販賣高、15萬6,140t(前年7萬9,234t)は對外販賣であつた。

棒鋼シンデケート 1934年に於ける本シンデケートの活動は前年に比し實に目覺しいものがあつた。其の國內取引は建築、土木兩工

業の著しい需要増加に依つて活況を呈し一方輸出貿易に於ても、從來の得意先諸國の製鋼業が著しい發達を示したにも拘らずこれ又目覺しく前進した。價格は、英國、ポーランド及日本の競争激甚であつた爲め殆ど不變で而も或る海外市場では軟調を追つたことさへあつた。販賣高次の如し。

	1934年	1933年
販賣總高	2,634,659t	1,483,376t
内、國內	2,046,291t	1,091,013t
輸 出	588,368t	392,363t

フープシンデケート 本シンデケートの國內取引は1934年の中頃一時顯著な變動があつた外は年間を通じ着實な活動を見せ又輸出貿易も前年より好轉した。1934年6月30日を以て第1回の誕生日を迎へた國際フープ及チューブ、ストリップシンデケートの活動は各組合員の満足を與へたのであつた。價格は可なり動きを見せ、或る無競争市場に於てはベース値段は80志まで昂騰したが其他の市場に於ては反落せる所もあつた。販賣高次の如し。

	1934年	1933年
販賣總高	531,622t	386,643t
内、國內	448,918t	313,554t
輸 出	82,704t	73,089t

厚板及薄板シンデケート 厚板シンデケート1934年の取引は頗る活潑で造船所からの注文著しく増加した。輸出貿易も活況を呈したが而も英國と船用鋼板の協定成立した結果取引安定し注文は一層規則的に發注されるやうになり、價格も亦幾らか立ち直つた。販賣高次の如し。

	1934年	1933年
販賣總高	774,066t	359,859t
内、國內	577,687t	280,902t
輸 出	166,379t	78,957t

薄板シンデケートに於ても亦1934年は内外市場共活況を呈し、且輸出價格も幾らか上向いた。販賣高次の如し。

	1934年	1933年
販賣總高	153,884t	83,588t
内、國內	132,362t	71,137t
輸 出	21,522t	12,451t

薄手薄板シンデケートの報告に依れば、1934年1月に於ける製造工場の作業率は41.6%であつたが、逐月増加し12月には80.7%に達した。言ふまでもなくこれは需要の著しい増大を物語るものである。1934年の國內取引高は前年の57萬4,776tに對し70萬5,600tに増大した。因に本シンデケートに於ては對外取引を行はない。

前述の如く獨逸製鋼所組合は1934年に於ては年間を通し内外市場共頗る満足なる業績を収むることを得た。其の取引高の詳細は次表に示す通りである。尙本組合1935年の取引は其の臨時報告に依れば更に著しい前進を報じてゐるが同年に於ける業績如何の發表を興味を以て待たる。

1934年に於ける獨逸製鋼所組合鐵鋼販賣高表(單位1,000噸)

	販賣總高	國內販賣高	輸 出 高
半 製 品	777.2	528.2	249.0
鐵 道 材 料	880.0	734.8	145.2
形 鋼	718.8	562.7	156.1
棒 鋼	2,634.7	2,046.3	588.4
フ	531.6	448.9	82.7
厚 板	744.1	577.7	166.4

薄板	153.9	132.4	21.5
ユニバーサル平鋼	170.1	147.2	22.9
計	6,610.4	5,178.2	1,432.2
薄手薄板	705.6	705.6	—
亜鉛及亜鉛鋼板	82.3	82.3	—

佛國鐵工業概況 (昭和11年1月11日附在里昂帝國領事友田二郎報告) 世界大戰以來佛國經濟機構中最大な變化を見たのは鐵工業の發達であつて現今佛國産業貿易上に於て同工業の占むる地位は最重要なるものである。仍て其現況を略述して見よう。

(佛國統計時報に據る)

先づ銑鐵に就て觀るに世界生産額は1913年と恐慌前年たる1929年との比較では21%の増加を示して居るが、佛國では520萬tより1,040萬tに上り正に100%の増加を示して居る。之を英國の生産額と比較すると1913年には英國の約半分であつたものが、1929年には之を凌駕すること3分である。米國と比較すれば劣るけれども戦前の1/4から1929年には1/2となつてゐる。

獨逸=ルクセンブルグ=プロックの戦前銑鐵生産高は佛國の4倍であつたが、1929年には獨逸=ルクセンブルグ=ザール・プロックの60%になり獨逸のみに對すると(ザールを除く)80%に達した。粗鋼では同期の世界生産高は60%を増したが、佛國生産高は100%の増加を示してゐる(470萬tより950萬tへ)然るに英國は60%獨逸=ザール=ルクセンブルグ・プロックは54%の増加を見せたるに過ぎず、同期間米國製鋼額は大いに増大せるも佛國生産額との比率は7對1より6對1となるに過ぎない。

佛國製鐵、製鋼業は1931年には15萬の従業員を使用して居るが戦前之は4萬8,000に過ぎなかつた。本工業は鐵鑛と石炭との分布状態によつて大體4地方に分れ存在して居る。往時19世紀初頭に至る迄は製鐵業は薪炭精煉法を行つて居た爲め森林地方の近邊に在り従つて全佛に散在して居たが現今骸炭精煉法となつてからは極度に集中化した。ロレーヌ鐵山地方に存する東部製鐵工業地方、炭坑地帯に在る北部製鐵工業地、中部地方の鐵及炭坑地帯に存するもの及西部中心地(ノルマンデー鐵山、アンジウ、アルターニエ炭田附近)とが佛國製鐵工業中心地である。此中でも東部地方のものが最重要であつて、且本工業地帯は歐洲でも最有力な鐵鑛脈の上に存し、佛國銑鐵生産高の%、粗鋼生産高の%を産出する。更に東部製鐵工業地はムールト・エ・モゼル地方(ロンヴィ、ブリエー、ナンシイの諸都市群)とモゼル地方(メツツ、チオンヴィル炭田)とに分れて居る。ムールト・エ・モゼル地方の銑鐵生産高は全佛生産高の43%を占め1913年356萬tより1930年430萬噸に達し、1934年には263萬tに減退した。モゼル地方の銑鐵生産高は全佛の35%、粗鋼製造高は30乃至32%である。此地方の銑鐵生産高は前者と異なり大戰前より減少して居る。(1913年386萬t、1930年351萬t、1934年215萬t)前記製鐵地方は悉く大戰の結果佛蘭西に再歸屬せるロレーヌ州に在り且銑鐵の%、粗鋼の全部が5工場によつて製造せられて居る。1930年にはモゼル地方に11の製鐵工場があり3萬7,800人の従業員を擁して居た。ムールト・エ・モゼル地方には18工場4萬2,000の従業員を算した。最近の推定によると佛蘭西の鐵鑛埋藏量は45億tと謂はれ其中40億はロレーヌ州に存する、而して現在の採掘量から推算すると今後100年に滿たずして全部を掘盡して仕舞ふことになる故に、近年古鐵(古鐵は實に100%の鐵鑛と謂へる)の消費量が激増し、其海外輸出を抑制する様になつてきた。骸炭に就て見ると戦前佛國は精煉用骸炭の53%を外國の供給に仰いで居た(獨逸より41%)而してロレーヌ州の佛國復歸は更に骸炭の輸入を増大せしめたのである。此事態に鑑みて炭坑或は製鐵工場等に於て骸炭製造設備

を増加し、海外輸入の防遏に努力した爲骸炭製造工場の生産高は戦前290萬tより500萬tに増加し且精鐵工場附屬骸炭製造工場では350萬tを製造するに至つた。然し尙佛國は骸炭製造用の特殊石炭の一部を外國に仰いで居る。ロレーヌ州銑鐵1tは原鑛3t、骸炭1t以上を要すると謂はる、原鑛は骸炭より遙に安價である。1930年のロレーヌ銑鐵1tの生産費中骸炭は60%なるに反し、原鑛は僅に20%に當つて居るに過ぎない。此點に於て尙大いに研究を要すべきものがあるとして特に佛蘭西炭坑業者の協力を所期して居る。又ロレーヌ州製鐵額の増大は佛蘭西經濟に頗る貢獻し、先づ佛蘭西の需要に適應する機械製造工業の發達を見、又特殊鋼操作技術の完成を生んだ佛蘭西自動車工業の異常なる發展は之に因るものである。翻つて輸出特に世界的不況時代の輸出に就て觀察するに、佛國輸出總額(價額)中金屬工業の占むる比率は次の通りである。

1913年	11.85%	1924年	16.55%	1930年	21.57%
1934年	25.15%	1935年	24.06%		

勿論該工業品の輸出は明かに不況の影響を受けて居て、1930年90億5,400萬法より1934年44億2,500萬法に減退して居る。然し此の減少率は他の佛國輸出品特に纖維工業製品の減少率よりは遙に低いものである。之は近年各國が自國の日常消耗品は自國工業に依つて自給し得る域に達しつゝあるが、尙自國の土地に存しない原料を要する製品に關する限りは未だ其の域に達し難い困難があるからである。斯く觀察すれば佛國の對外貿易バランス改善には金屬工業の發達の結果に負ふ所甚だ尠くないと謂へるであらう。

(海外經濟事情昭和11年2月號所載)

米國の屑鐵輸出は高値の爲めに行惱む (Daily Metal Trade Jan. 24, 1936)「屑鋼の一般的高値は製鋼作業率増加の爲めであり、東部市場に於ける12弗50仙は過去5ヶ年間の最高値」

米國に於ける屑鋼の現在の高値は製鋼業の作業率が50%近くに増加した爲めと見られてゐるが東部ペンシルヴァニアの1級品12弗50仙は1930年9月以來の最高値である。不況時に於ける最低値は1932年6-7月頃の6弗25仙であつた。1929年製鋼業が全能力を擧げて作業して居つた時の最高値は17弗50仙であつた。屑鋼の市場値段は若し莫大なる輸出がないとすれば現在のレベルより少くとも50仙乃至1弗は低くなるだらうと見られて居る。1934年の輸出高は183萬5,000tであつたが、昨1935年は11月迄の統計で既に189萬9,000tに達してゐる爲め全年の數字は少くとも200萬tに到達するものと見られる。

輸出は價格を強める 屑鐵の輸出高は莫大な數量に上り屑鋼業者に取つて有利な商賣であつた。そしてそこに屑鋼價格の昂騰が伴つた。然し茲に屑鋼輸出の將來に就て考慮を要すべき事象は昨年8月以來の輸出數字に漸減の跡が見られることであつて、これは主として餘りに高値の爲め日本が輸入を差控へて居るが爲めと見られる。然し英、伊向きの輸出は従前と殆んど變りはない。

供給は減せず 屑鋼の輸出は少からざる數量に上つて居るが、これが爲め供給難に陥つたと云ふことはない。一方輸出は値段があまり高過ぎれば其の殷賑を期待することは出来ない。屑鋼業者は國內の需要のみでは屑を蒐集しても利益は得られない。米國の屑鋼資源は莫大なるものがあつて屑は腐朽せる建築物、橋梁、機械、自動車其他の構造物から還元する。例へば紐育に於て取壊しを豫定して居る1工場から約1萬tの屑が得られることになつて居る。故に最近に於ける屑鋼輸出の激増は多少價格を吊り上げたと云へこれが爲め國內の供給資源が枯渇するものと思はれない。

輸出は屑鋼業者に取り救ひの神 云ふ迄でもなく屑鐵業者の立場

から云へば輸出取引は彼等の救ひの神であつて若し對外取引がなかつたとすれば彼等は苦境から免かれ得なかつたであらう。最近目新しい事象の一はボストン港から多量の1級屑鋼がスペインへ向け積み出されたこと一一方日本向屑鋼中に錫再生用の鉄力板屑が多量に含んで居ることである。

米國の鉄力屑禁輸法適用 (4月7日著在米、齋藤特命全權大使電報) 1936年4月4日國務長官は、本年2月15日の鉄力屑輸出禁止法に基き、(イ) tinplate scrap. の定義、(ロ) 本年4月16日より7月1日迄の間此鉄力屑の輸出に對し絶対にライセンスを與へざること、(ハ) 7月1日以後は軍需品監督局に於て此禁止法の目的に違反せずと認めたる場合に限りライセンスを下付すること、の3點を定めたる施行規則を公布する所ありたり。(外務省通商局日報79)

英國輸入鋼製品關稅引上申請審議 英國輸入稅諮問委員は次の商品に對する輸入稅引上の申請を受理し、之を審議する旨發表せり。全部銅若は重量 50% 以上の銅を含む合金より成る管類、鋸類、ストリップ、ディスク及サークル類。(以上在英、朝日大使館商務書記官報告) (外務省通商局日報73)

熔鑄爐の増設を認可 商工省は13日附を以て、日本製鐵、日本鋼管、淺野造船3社に對し、豫て申請中であつた熔鑄爐の増設認可の指令を發した。なほ淺野、小倉及び中山製鋼に對しても目下調査中でその結果を俟ち追つて認可する方針である。此は從來の商工省の日鐵第一主義の轉向を端的に示すもので、最近の製鐵界の情勢殊に國防上並に基礎産業確立等の見地から全製鐵界を動員して一刻も早く銑鐵の自給自足の達成を圖らんとするにあるが、認可を指定されたるは次の如くである。

1. 日本製鐵 八幡製鐵所に新設の1,000[※]t 爐 (年産30萬t 能力) 1基、火入れは明年1月の豫定。
1. 日本鋼管 川崎工場に設ける400t 爐 (年産14萬4,000t 能力) 1基。
1. 淺野造船 中島商相時代に設立認可され目下工事中の鶴見の170t 爐を改造するもので300t 爐 (年産10萬t 能力) 1基、なほ淺野、小倉、中山の分は各350t 爐 (年産12萬t 能力) 1基づゝで今回認可されたものと追つて認可見込のものを合すると將來80數萬t の銑鐵を生産し得ることとなるのである。

小川商相が計畫適切なるものは今後も續々認可すると、商工省では日本鋼管、淺野造船の熔鑄爐建設認可と同時に商相談の形式をもつて次の如き聲明書を發表した。

現在製鐵業獎勵法に基く諸稅免稅の特典を受けんとし熔鑄爐増設計畫認可申請が數件あるが鐵鋼界の現況に鑑みるに速かに製銑設備を増設し目下の銑鐵需要の急増に應ずる必要がある。據つて日本製鐵會社に於ても極力増産計畫の實施に努めつゝあるが現下の事情から見て日本製鐵會社以外の銑鐵増産計畫に對してその合理的なるものについてはこれを認可する方針を以て調査を進めつゝあつたところ今回調査の完了した日本鋼管、淺野造船2社の計畫に對して認可をなしたのである尚ほ殘餘の分についても速かに調査を遂げその計畫の適切なるものについてはこれを認可する積りである。

(中外夕刊4月14日)

日滿鐵鋼策の統制調整が肝要 (22日第1回協議會) わが鐵鋼國策は原則として日本製鐵中心主義をとつて來たがその後内外の政治、經濟、社會情勢の變化に伴ひますます鐵鋼國策の重要性が認識されるとともにこれに對する全面的再檢討と新鐵鋼國策確立の必要が各方面より要望されるに至つたので小川商相は關係各省を網羅する鐵鋼國策協議會を開催すべく22日本省會議室において打合會を

開催。

商工省より吉野次官、小島鑛山局長、鈴木鑛山局鑛政課長、陸海軍兩省より陸軍動員課中西少佐、海軍軍務局濱田、遠藤兩少佐、内閣調査局より藤田調査官、拓務省より江口商工課長、對滿事務局より竹内殖産課長、資源局植村總務部長など出席。

打合の結果鐵鋼國策に關し全面的檢討を行ふこととし、まづ第一に日滿の鐵鋼政策に關する統制ならびに調整をはかる必要を認めこの方面より具體的方策を樹立することに決定した。しかして協議會は今後毎週1回開催するはずで次回は來月1日開く。

(大毎4月22日)

日鐵の鑛山買收計畫「先づ釜石と交渉」 日本製鐵では銑鋼一貫作業の徹底化を計るため曩に朝鮮の茂山(三菱鑛業所有)釜石(三井系釜石鑛山所有)北海道の洞爺(三井系輪西鑛山所有)の各鑛山を買收して鑛石不足を補給する計畫を樹立し内交渉に着手したが種々の理由から一時停頓状態に陥つたので、今回釜石製鐵所の増産熔鑄爐700t(1基増設)具體化を契機として同製鐵所に隣接の位置にある釜石鑛山買收の交渉を再燃せしむることとなつた。

釜石鑛山の鑛石は含有量 53% の磁鐵礦で埋藏量は1,600萬t乃至4,000萬tと推定され、現在年30萬tを生産してをり日鐵買收後は更にこの生産量を擴大せしむる見込である。

向日鐵では鑛石補給の意味で南洋マレー半島の海外鐵鋼資源の開発についても鋭意研究中である。

(東朝4月18日)

輕銀と帶鐵從價2割引上か 「藥品は見合せに傾く」大藏省では10日午後關稅調查會幹事會を開き前日に引續き懸案のアルミニウム、帶鐵並にアスピリン外數種の藥品關稅引上案を審議した結果、アルミニウム及び帶鐵については依然内地の生産高並にその品質の點で多少の問題が残されてをり、關稅引上に伴ふ市價の影響をも今一應研究の要ありとして來週中更に幹事會を續開の上最後の決定をなすこととして散會したが、大體の意向としてはアルミニウム帶鐵ともに從價2割程度に稅率を引上げ實施することに傾いてゐる。なほ藥品については原料關係その他に難點があり市價騰貴のことも考慮されるので大體の空氣は關稅改正を見合せる方向に向つてゐるやうである。

(東朝4月11日)

大島製鋼所の今昔 株式會社大島製鋼所は大正6年11月東京製鋼大島工場が分離獨立したものである。いふまでもなく大正6年といへば時恰も我國鐵鋼業の勃興期で、斯業各社は晝夜無休に業を進めて向日足らざるの好況期であつた。斯る恵まれたる情勢の下において、創立早々、當社は工場の擴張、機械の増設を斷行、以て順風滿帆に好況の波を泳ぎ、しかも不斷の技術的研鑽は、その後の反動期に斷然斯業に光りを放つて、他社の如く大きな打撃を受けることを免れ、更に軍需インフレの段階に入るや、時代の恩恵を最も的確に反映して業績頓に好轉、今日同社の各種製品は船舶、鐵道、電氣、兵器、製紙、道路、港灣、土木、建築等の各工業部門に廣く行き互り品位の優秀さを謳はれてゐる。現在當社は資本金600萬圓(全額拂込済)で、社長に大川平三郎氏、副社長に長谷川太郎吉氏、専務に石田直吉氏、取締役は田中榮八郎、白石元治郎、門野重九郎、津田藤左衛門の四氏、監査役に大倉彦一郎、淺野良一の兩氏が就任財界の一流どころで陣を固め、工場所在地は城東區大島町であるが敷地2萬3,000坪、建物坪數1,200坪に上つてゐる。いまその生産設備並に能力を列記すれば次の如くである。

▽製鋼 = 35t 並に 25t 平爐各1基、15t 平爐2基、6t エルース電氣爐1基、3t 並に 5t 熔銑爐各1基、しかして年産能力は鋼塊6萬5,000t、鑄鋼及鑄鐵8,000t。

▽鑄造=軟化爐、鑄型乾燥爐各2基、外に空氣壓搾機、電氣熔接装置、起重機等各種。

▽鍛造=2,000t、800t及び600tの水壓鍛鍊機各1基、300t水壓搾出機1基、200t水壓搾出機2基、外に調質爐、灼熱爐、軟化爐、蒸汽鋸起重機等しかして鍛造物並に素材成形物の年産能力は1萬2,000tに上り、鍛鋼1個の最大重量は30tである。

▽機械=最大シャフト・レース、最大平面盤、最大平削機各2基300t ホキール・プレス1基、其他各種仕上機械120基を据付け、仕上能力は車輪車軸年額3,000對、輪心1萬5,000個、電車用ギヤー・ホキール1,000個見當。

▽製罐=40馬力、30馬力の各空氣壓搾機各1基、プレート・ローラー、ポンチ・シャーリング機械その他の最新式製罐施設

以上の事業内容の中鑄鋼品は最大重量40tのものも當工場内で容易に製造加工され、近時造船、電氣關係の各社よりこれ等大型物の

の需要急増しつゝある。また當社の機械設計製作は早くより製鐵、製糖方面より好評を博してゐるが、近來製紙機械方面における當社の進出は誠に目覺しきものがあり、當社製の新新聞紙抄造用高速度長網抄紙機はその性能において歐米の優秀品を凝駕するといはれ、附屬機械もまたその眞價を製紙界に謳はれてゐるのである。一方鍛造工場における2,000t水壓鍛鍊機は當社獨特の施設で、これによる製品は軍需品として當局より多額の用命を受け、當社工場は陸海軍の指定工場となつてゐる。所謂世界政情の緊迫は、各國をして好むと好まざるに拘らず軍備の擴張に狂奔せしめ、我國もこれに超然たるを許されない情勢にある。斯る際にあつて重工業部門の活況は必然であり、更にまた大型物の鍛鋼、鑄鋼において斯界に特異の技術を誇る大島製鋼所今後の活躍こそ正に刮目に價するといふべきであらう。(中外商業4月25日)

昭和11年外國銑輸入高表

(銑鐵共同販賣會社)

(單位 噸)

月次	輸 出 國 名					計
	印 度	英 國	獨 逸	米 國	瑞 典 露 西 亞	
1	30,879	—	—	264	—	31,143
2	35,660	—	—	207	7,749	43,616
計	66,539	—	—	471	7,749	74,759

昭和11年1月中重要生産月報抜萃

(商工大臣官房統計課)

品名	生産額	1月中	前月中	前年同月	1月以降累計	
					昭和11年	昭和10年
金	(gr)	21,417,296	1,658,070	1,321,772		
銀	(〃)	809,545	22,584,549	18,874,238		
銅	(kg)	5,862,377	6,232,715	5,446,498		
鉛	(〃)	594,301	629,760	492,188		
錫	(〃)	2,894,622	2,744,188	2,568,014		
亜鉛	(〃)	196,898	181,979	128,634		
錫	(t)	13,159	13,753	11,503		
硫	(〃)	128,277	130,109	105,313		
鐵	(〃)	416,855	476,668	371,319		
セメント	(〃)	100,825	96,616	71,494		
硫	(〃)	16,070	—	—		
石炭	(〃)	2,935,205	3,279,426	2,844,615		
石油(原油)	(100l)	291,069	234,292	275,114		

昭和11年2月中重要生産月報抜萃

(商工大臣官房統計課)

品名	生産額	2月中	前月中	前年同月	1月以降累計	
					昭和11年	昭和10年
金	(gr)	1,037,657	1,417,296	1,265,904	3,054,953	2,587,376
銀	(〃)	21,668,808	20,809,545	18,314,455	42,496,353	37,188,693
銅	(kg)	5,852,385	5,862,377	5,510,991	11,714,762	57,489
鉛	(〃)	555,193	594,301	545,359	1,149,494	1,037,547
錫	(〃)	2,635,001	2,894,622	2,268,733	5,529,623	4,836,747
亜鉛	(〃)	181,164	196,898	143,162	373,062	271,796
錫	(t)	11,412	13,159	10,632	24,571	22,185
硫	(〃)	125,301	128,277	96,866	253,578	202,119
鐵	(〃)	395,249	416,855	342,398	812,104	713,717
セメント	(〃)	3,148,420	2,935,205	2,735,953	6,083,625	630,568
硫	(〃)	—	—	—	—	—
石炭	(〃)	2,935,205	3,279,426	2,844,615	6,083,625	630,568
石油(原油)	(100l)	262,899	291,069	240,585	553,968	515,699

主要製鐵所昭和11年1月分鐵鋼材生産高調 (單位噸) (商工省鐵山局)

種 別		昭和11年1月	昭和10年1月	増 減	種 別		昭和11年1月	昭和10年1月	増 減
銑 鋼 鑄 販賣向鋼片	鐵	180,883	175,314	5,569	販賣向 シートバー 鍛鋼品 壓延鋼材	鮮洲	30,702	11,900	18,802
	塊	52,524	44,934	7,590		内、滿	—	—	—
	内、滿	380,755	351,938	28,817		鮮洲	5,439	4,488	951
	鮮洲	24,158	—	—		内、滿	—	—	—
	内、滿	7,632	6,266	1,366		鮮洲	285,153	281,605	3,548
内、滿	—	—	—	内、滿	6,509	—	—	—	
内、滿	12,191	11,249	941						
内、滿	3,086	—	—						
壓 延 鋼 材 内 譯									
厚0.7mm以下	内、滿	24,680	25,400	△ 720	軌 條	鮮洲	27,104	36,026	△ 8,922
鋼板	内、滿	1,825	—	—	線 材	内、滿	516	—	—
其他鋼板	内、滿	59,001	54,547	4,454	鋼 管	鮮洲	38,949	31,725	7,224
錳力板	内、滿	27	—	—	帶 鐵	内、滿	—	—	—
棒 鋼	内、滿	9,545	7,502	2,042	其 他	鮮洲	12,965	12,566	399
形 鋼	内、滿	64,903	71,455	△ 6,552		内、滿	—	—	—
	内、滿	3,948	—	—		鮮洲	4,691	—	—
	内、滿	40,315	38,942	1,373		内、滿	—	—	—
	内、滿	—	—	—		鮮洲	3,000	3,442	△ 442
		—	—	—		内、滿	193	—	—

備考 △印は生産減を示す。

主要製鐵所昭和11年2月分鐵鋼材生産高調 (單位噸) (商工省鐵山局)

種 別	2 月 分			累 計			
	昭和11年	昭和10年	増 減	昭和11年	昭和10年	増 減	
銑 鋼 鑄 販賣向鋼片	鐵	168,277	158,465	9,812	349,160	333,779	15,381
	塊	51,891	49,100	2,791	104,415	94,034	10,381
	内、滿	396,848	340,121	56,727	777,603	692,059	85,544
	鮮洲	23,040	—	23,040	47,198	—	47,198
	内、滿	8,538	7,490	1,080	14,374	13,756	618
販賣向鋼片	内、滿	11,012	10,966	46	23,203	22,215	988
販賣向	内、滿	4,708	—	4,708	7,794	—	7,794
シートバー	内、滿	30,798	14,166	16,632	61,500	26,066	35,434
鍛鋼品	内、滿	4,618	—	4,618	10,999	—	10,999
	内、滿	4,966	5,116	△ 150	10,405	9,604	801
壓延鋼材	内、滿	330,288	291,311	38,976	616,441	572,916	43,527
	内、滿	8,746	—	8,746	15,355	—	15,355
壓 延 鋼 材 内 譯							
厚0.7mm以下	内、滿	33,962	28,908	5,053	58,642	54,308	4,334
鋼板	内、滿	1,998	—	1,998	3,923	—	3,923
其他鋼板	内、滿	73,586	60,227	13,359	132,587	114,774	17,813
錳力板	内、滿	—	—	—	27	—	27
棒 鋼	内、滿	10,942	7,380	3,562	20,487	14,882	5,605
形 鋼	内、滿	76,781	75,416	1,365	141,684	146,871	△ 5,187
	内、滿	4,420	—	4,420	8,368	—	8,368
軌 條	内、滿	46,633	40,667	5,966	86,948	79,609	7,339
	内、滿	26,385	29,864	△ 3,479	53,489	65,890	△ 12,401
	内、滿	—	—	—	516	—	516
線鋼帶	内、滿	39,222	30,647	8,575	78,171	62,372	15,799
其 他	内、滿	13,864	14,142	△ 278	27,829	26,708	1,121
	内、滿	5,053	—	5,053	9,744	—	9,744
	内、滿	3,860	4,060	△ 200	6,860	7,502	△ 642
	内、滿	2,328	—	2,328	2,521	—	2,521

内外最近刊行誌參考記事目次

The Iron Age, No. 7-10, 1936.

- Better machine Tools for the Toolmaker. F. S. Blackall. No. 7. p. 37.
- The welding of alloy steels—II. J. C. Hodge. No. 7. p. 52.
- Aluminum—From a chemical element to an industrial metal. Zay Jeffries. No. 8. p. 22.
- Corrosion after pickling major source of galvanizer's dross. W. G. Imhoff. No. 8. p. 30.
- Conveyors applied to strip mill pickling operations. J. H. Hough. No. 8. p. 34.
- Developments in welding of copper alloys. I. T. Hook. No. 8. p. 40.
- Correlation betw. metallography and mechanical Testing. H. F. Moore. No. 9. p. 26.
- Microscopic study of ancient Bronze and Copper. C. G. Fink. No. 9. p. 34.
- The railroads and light weight equipment. W. W. Colpitts. No. 9. p. 38.
- Beryllium and its alloy. No. 10. p. 28.
- Screw machine practice for new free cutting aluminum alloys. J. F. Coneen. No. 10. p. 32.

Blast furnace and Steel plant, Feb. 1936.

- Refining Iron to the malleable condition. WM. McCannachie. p. 141.
- Primary crystallization of metals. F. R. Hensel. p. 145.
- The Fundamentals of Rolling. Part IV. N. A. Sobolevsky. p. 149.
- The Deblanchal Rotary melting Furnace. C. F. Herrington. p. 156.
- The Steven's open hearth furnace. p. 157.
- Finishing the heat of steel. Part XL. J. H. Hruska. p. 160.
- Practical operations are safe operations. F. A. Morrison. p. 164.

Iron & Steel Ind., Feb. 1936.

- Developments in the Production of malleable castings—IV. H. H. Shepherd. p. 167.
- New ways for old in the foundry. Frank Whitehouse. p. 172.
- Open hearth slag. W. Ash. p. 174.
- Strength of metals under combined alternating stresses. H. J. Gough. p. 177.
- Rimming steels. A. Jackson. p. 179.

Stahle und Eisen. Heft 4-S. 1936.

- Grundlagen des Leichtbaues (II Teil). Paulssen Ottokar. s. 81.
- Die Wärmeverluste der Thomasbirne in Verlauf einer Konverterreise. Eugen Peetz. s. 86.
- Betriebswirtschaftliche Arbeit auf Eisenhüttenwerken. Matejka, Erich A. s. 105.
- Versuche über den Abbrand in Walzwerksöfen. Sträuber, Franz. s. 108.
- Aus der Tätigkeit des Vereins deutscher Eisenhüttenleute im Jahre 1935. s. 141.
- Schönheit der Arbeitsstätten. Rein, Arthur. s. 163.
- Ueber den Einfluss des Kohlenstoffs auf den Ablauf der Stahlerzeugungsverfahren. Körber, Friedrich. s. 181.
- Der Einfluss betriebswirtschaftlicher Gedankengänge auf die Stoffwirtschaft. Rummer, Kurt. s. 221.
- Herstellung und Verwendung von Bleilagermetallen. Schmidt, Richard. s. 228.
- Zur Grossen Leipziger Frühjahrsmesse 1936. Schmitz, Franz. s. 249.
- Die Grabungen auf vorgeschichtlichen Eisenhüttenplätzen des Siegerlandes, ihre Bedeutung und die hüttentechnischen Erfahrungen im Vergleich mit anderen Funden. Josef, Wilhelm. s. 252.

Archiv für das Eisenhüttenwesen. Heft 8. Feb. 1936.

- Die Spezifischen Wärmer der Gase als Hilfswerte zur Berechnung von Gleichgewichten. Carl Schwarz. s. 389.
- Kritische Untersuchung der Aschebestimmung in Steinkohlen. Carl Holthaus. s. 369.
- Das Festfressen von Schraubenverbindungen bei höheren Temperaturen. Hermann V. s. 397.
- Einfluss von Legierungszusätzen auf das zundern des Eisens. Erich Scheil. s. 405.
- Die Ausschaltung von Störungseinflüssen bei der Auswertung der buchmässigen Selbstkosten. H. Kreis. s. 417.

Die Giesserei. Heft 3-4. 1936.

- Rückblick auf die Entwicklung des Arbeitsschutzes. Ludwig Czimatis. s. 49.
- Die richtige Ausbesserung von Grauguss durch Gasschmelzschweissen mit Gusseisen. H. Reininger. s. 52.
- Die röntgenographische Feingefügeuntersuchung in der Giessereipraxis. A. Karsten. s. 57.
- Die Vorträge auf dem internationalen Giessereikongress in Brüssel im Sep. 1935. s. 59.
- Versuchsergebnisse mit Koks aus Kohle verschiedener geologischer Herkunft im Giessereischaffofen. W. Holländerbäumer. s. 73.
- Aus der Kupolofenproxis mit Saarkoks. Giessereileiter Karl Bäsel. s. 77.
- Koksverbrauch 6% und Schmelzeinsatz 100% Bruch. Carl Rein. s. 78.
- Die Vorträge auf dem internationalen Giessereikongress in Brüssel im sep. 1935. s. 81.

(鈴木)

金屬の研究 第13卷 第2號 昭和11年2月

- 炭素鋼のa麻留田に就て 西山 善次 (37)
- 銅-ニッケル合金の剛性率の測定 菊地 麟平 (41)
- 鐵中の微量酸素の水素による還元 福島 政治 遠藤 岸郎 (46)
- 金屬セメンテーション (第8報) 加瀬 勉 (50)
- チタニウムに依るセメンテーション
- 諸種の金屬の振り加工による剪斷内力の分布と焼鈍によるその變化の研究 (II) 上田 太郎 (61)

工業雜誌 第72卷 第903號 昭和11年3月

- 遠心鑄造法 (2) 梅津 七藏 (106)

機械學會誌 第39卷 第227號 昭和11年3月

- 旋盤切削諸元指定に就て (昭和10年12月20日第24回講演會に於て講演) (133)
- 三善幾久松 相原 榮一
- 衝擊試驗片に關する研究 (昭和10年10月17日名古屋臨時大會講演會に於て講演) (147)
- 山田良之助 松岡 陽三

理化學研究所彙報 第15輯 第3號 昭和11年3月

- 金屬腐蝕の基礎理論 飯高 一郎 (131)
- 高溫度に於ける金屬マグネシウムの酸化に就て 鈴木 豊 (147)

石炭時報 第11卷 第3號 昭和11年3月

- 最近の歐米採炭實技 (2) 佐野秀之助 (210)
- バンカー炭の性質と其の改善方法 森永 泰士 (227)
- 北辰炭坑瓦斯計に就て 森 武保 (233)
- 石炭機械扱作業に就て (鐵道省隅田川及び東高島驛) 鐵道省工作局 (241)

電氣化學 第4卷 第3號 昭和11年3月

- 錫電解製鍊法の研究 (第3報) 木村 善七 (87)
- 電解透析法に依る水酸化ニッケル沈澱の洗滌 岡 俊平 (107)
- アルミニウムの蒸餾 (第2報) 山口 與平 中澤 治男 (27)

電氣評論 第24卷 第3號 昭和11年3月

- 銲接物の非破壊検査法 岡本 尅 加藤 次郎 (175)

金屬 第6卷 第3號 昭和11年3月

- 機械材料用特殊鋼に就て 錦織 清治 (143)

工業化學雜誌 第39編 第457號 昭和11年3月

- 石炭を構成する酸素の研究 稻葉 卓也 阿部 吉紹 (167)

鑄物 第8卷 第3號 昭和11年3月

- 復水器蓋鑄造工事 海軍艦政本部 (141)
- 内燃機用アルミニウム製ピストン製作に就て 朝鮮總督府鐵道局京城工場 (145)

- Ni-Cr 鑄鐵の實用に就て 瀬戸 静夫 (150)

- 砲金の銲湯表面に現はれる色彩とその溫度 諏訪常次郎 (165)

造兵彙報 第14卷 第3號 昭和11年3月

- 特殊鐵用錐の研究 宮島久次郎 (5)
- 酸性電氣爐操業法に就て 田村 宣武 藪内周三郎 (15)

研究報告 第479-483號 昭和11年2月

- 特殊鋼材第47種 (甲並=乙) (B. M. W. 用材)

- クロム-モリブデン鋼管並に鋼板の硬度測定に就て 渡瀬 常吉 (63)
- 冷却弁のナトリウムの検査 渡瀬 常吉 (74)
- 高錫磷青銅に就て 須永 信二 (78)
- エレクトロン金型試験材の熱處理と機械的性質 河口 虎夫 (94)
- 採鑛冶金月報 第14卷 第3號 昭和11年3月 渡瀬 常吉 (99)
- 亞鉛電鍍用陽極に就て(2) 仲田 旭 (73)
- 電氣化學の進歩 昭和11年3月
- 電氣分析 箱守新一郎 (16)
- 電鍍及び電鑄 正木 康作 (18)
- 金屬の腐蝕及び防錆 中島 正巳 (22)
- 濕式電氣冶金 小川 芳樹 (26)
- 無機電解酸化還元 北川 二郎 (29)
- 電氣用カーボン 石川 等 (38)
- 電氣爐 原田 梧樓 (40)
- 耐火材料 近藤 清治 (48)
- 熔融鹽電解及び輕金屬冶金 伏屋義一郎 佐々木熊三 (50)
- 電氣製鐵製鋼及び鐵合金 向山 幹夫 (53)
- 非鐵合金 河上 益夫 (57)
- 電氣銲接 黃金井晴正 (71)
- 電氣製鋼 第12卷 第3號 昭和11年3月
- タングステン鋼の燒割れ原因と其の防止法 錦織 清治 磐城 恒隆 (137)
- 高周波無鐵心誘導爐の實際に就て(1) 成瀬 惠 (148)
- 鋼中の非金屬含有物に就て 小島 義正 (156)
- 造船協會會報
- 新電弧銲接方法に就て 赤崎 繁 (15)
- 日本鑛業會誌 第52卷 第611號 昭和11年3月
- グリーンワルト燒結法に就て 龍野 昌之 (117)
- 高酸高電流密度の電氣銅製煉に關する研究 平社敬之助 (125)
- 近代金屬材料に於ける金屬コバルトの効果 橋本 守一 (144)
- 捲網の衝擊に對する安全度に就て 水田 準一 (159)
- 滿洲冶金學會會報 第8號 昭和11年3月
- ドイツ製鐵界所見 淺輪 三郎 (1)
- 大孤山貧鐵鑛の磁氣選鑛に關する基礎的研究 阿部 徹 仲澤 雪男 (12)
- 磁性赤鐵鑛に就て 仲澤 雪男 (31)
- 滿洲冶金學會記事 (42)
- 銀アルミニウム系合金の銀側狀態圖と變態性質に就て 萩谷 正巳 大日方一司
- 錫青銅の狀態圖に關する X 線的的研究 伊澤猛三郎 (1)
- 金屬の研究 第13卷 第3號 昭和11年3月
- 燒入燒戻炭素鋼の麻留田に關する X 線的的研究 西山 善次 (83)
- 金屬中に於ける價電子 (Valency electron) の勢力狀態 (Energy State) に就て (第1報) 11 亞鉛の價電子結晶勢力準位 (Crystal energy level) 佐藤 充 (92)
- 鐵單結晶の彈性恒數測定 木村 鍊一 大野 嘉一 (99)
- 諸種の金屬の振り加工による剪斷内力の分布と鈍鈍によるその變化の研究(III) 上田 太郎 (103)
- 水曜會誌 第8卷 第10號 昭和11年3月
- 黃銅鑛の浮選に對する鑛液の水素イオン濃度及び喜代次及び各種化學試薬の影響(第V報) 山田 賀一 若杉 二郎 (943)
- 本邦及び滿洲産石炭の炭塵可溶性に就て 和田 正美 (951)
- 雲伯地方より産する眞砂砂鐵より製造したる鹽基性電氣爐鋼材の研究 石垣 豐藏 (957)
- 鑛業評論 第7卷 第4號 昭和11年4月
- 栃木縣加蘇鑛山産滿鑛柘榴石及同縣眞名子鑛山産綠滿鑛に就て 吉村 豐文 (47)
- 資源 第6卷 第2號 昭和11年2月
- 合衆國の國家資源委員局に就て (1)
- 名古屋工業會會報 第156號 昭和11年4月
- 歐米の機械工場見學雜感 服部傳三郎 (2)
- エンヂニヤリング 第24卷 第4號 昭和11年4月1日
- ニッケル及び其の合金 藤原 唯義 (139)
- 工業雜誌 第72卷 第904號 昭和11年4月
- 石炭の燃焼に關して (139)
- 遠心鑄造法(3) 梅津 七藏 (150)
- 山西省の産業と貿易概況
- 山西省河川測量報告書
- 電氣評論 第24卷 第4號 昭和11年4月1日
- 銲接物の非破壊検査法 岡本 赴 加藤 次郎 (267)
- 金屬粒子分散系の電氣的製造方法 鳥養利三郎 山口 次郎 (283)